様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年４月１１日現在

機関番号：１２６０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５３０８０５
研究課題名（和文）：美術教育における単元の組織化と展開に関する多様性の研究

研究課題名（英文）：Curriculum Analysis of the Diversity in Art Teaching Unit Constitution and Process

研究代表者
山田　一美（YAMADA　KAZUMI）
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：８０２１０４４１

研究成果の概要（和文）：
本研究は、初学者や初任者が図画工作・美術の授業づくりにおいて理解しにくい教育プログラムを取り上げ、多様な構成法を便宜的に７群にまとめ分析し、授業づくりの理論的根拠を提示しようとした。最終年度の平成 22 年度の研究過程を通して、単元構成における「題材」概念の解明と考察が不可欠であることを突き止めた。結果、それまでの臨画法や写生画法、構想画法という伝統的な構成から、課題・問題解決的な授業構成や対話型授業構成法が試みられるにつれ、単元構成の中心概念である「題材」概念は変容しつつあるとする特質を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
This report is intended to analyze characteristics of teaching units and show the theoretical reasons for the organization of units.
Therefore, a variety of teaching processes to be organized were conveniently divided into seven categories, and the features were qualitatively compared and considered.
As a result of this research project, we concluded that it is necessary for us to examine and clarify the concept of subject matter (daizai) in unit constitution in the art curriculum. It depends on the reason. While diverse contemporary methods concerned with tasks or problem solving, for instance, communicative or discourse ways of teaching, were practiced in the 1970s, the methodologies of traditional constitution, such as picture drawing from life or nature, were decreased step by step.
This conclusion makes us recognize that the key concept of subject matter (daizai), which is the most important concept in the school art curriculum, has been changing in the teaching unit constitution of art education in Japan since the 1980s.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,900,000	570,000	2,470,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：美術教育学
科研費の分科・細目：教育学・教科教育学
キーワード：教育プログラム、カリキュラム開発、図画工作・美術科、プロジェクト、ワークショップ、単元構成、題材論

１．研究開始当初の背景

（１）実践理論の多義性と理解の困難性

今日、学校教育において開発・実践される美術教育のプログラムは、次の方法により発想・構想され具体化されることがほとんどである。

①種々の学習指導要領解説書からの独自の解釈、
②教科書解説書・マニュアル本・参考図書に所収のプログラムの活用、
③教科書作品・図版の再現・解釈、
④自己の身体経験（実制作活動）・身体実感の再生、
⑤こどもの様子の観察、子どもの表現特性、
⑥各種授業参観・研究からの転用・援用、
⑦行政企画・民間教育団体企画の教材研修、
⑧美術館企画・芸術団体企画の催事体験からの転用、
⑨美術展、芸術・アート活動における作家・作品への直接的な触れあい体験など。

また、学校教育における図画工作・美術教育の実践研究は、「題材開発」に注目するものが中心となり、単元構成・学習経験の質に着目する視点に乏しく、その題材がどのように活動化・授業化されるかは指導者の判断や思考に任されたままである。

（２）プロジェクト型・ワークショップ型授業の普及

今日、美術館教育普及の研究が進展し、対話型や参加型の教育プログラムの開発が盛んとなり、美術教育の関連学会において盛んに研究発表されるようになった。社会におけるアート活動の形態も多様化し、場・人・行事・コミュニケーションのあり方はさらに流動的に構成されつつある。その事例として、「ワークショップ型」「プロジェクト型」の活動構成法が取り上げられるようになり、学校教育との連携を契機に多様な取組が授業実践において試みられている。

その反面「ワークショップ」「プロジェクト」の概念はさらに多様化し、その概念定義さえ難しい状況にある。たとえば、武蔵野美術大学は、2002 年、通信の授業科目内に「ワークショップ研究Ⅰ・Ⅱ」を開設し、それを体系づけようとしたが（『ワークショップ実践研究』2002 年）、その研究対象は、学校教育と社会教育施設との両者の多岐にわたり、多義・多様で定義や意味の膨らみが大きい。

①養護学校での美術とワークショップ、
②大学サークル活動「造形教育研究会アトリエちびくろ」、
③アーチストによる子ども対象のワークショップ、
④児童館「こどもの城造形事業部」でのワークショップ活動、
⑤美術館におけるワークショップ、
⑥まちづくりワークショップ、
⑦個人経営の造形教室型の講習とワークショップ、
⑧身体・演劇活動とワークショップ、
⑨参加型の心理療法とワークショップ、
⑩精神科施設でのレクリエーション療法とワークショップ

ここでは、ワークショップは「人間関係」に焦点化され、コミュニケーションの問題と向き合い、「グループの各自が活動を主体的に組み立てる」（p.8）、「それぞれの参加者が主役であって、活動を強く牽引するリーダーが存在しない」（p.8）、「『これをやりなさい』と言わずに、ワークショップができるように刺激するコンダクターのような人が必要だ」（p.37）、「サバイバル方式」（p.39）、「共同作業としての表現活動」など、複雑な文脈で説明される。これらの手法や考え方は学校教育に取り入れられるにつれ、美術教育の単元構成をさらに複雑化してきた。そのため、教員養成系学部生及び経験年数の少ない教員にとっては、単元内容をどのように組織化したらよいかの点において、理解がきわめて困難な取組を強いられ、具体的なプログラム開発の着眼点を見出せず、授業構築に悩んでいる事例が多い。

これらの手法や考え方は学校教育に取り入れられるにつれ、美術教育の単元構成をさらに複雑化してきている。そのため、教員養成系学部生及び経験年数の少ない教員にとっては、単元内容をどのように組織化したらよいかの点において、理解がきわめて困難な取組を強いられ、具体的なプログラム開発の着眼点を見出せず、授業構築に悩んでいる事例が多い。

２．研究の目的

（１）美術教育における単元構成の課題整理

初学者や初任者が授業づくりにおいて理解しにくい教育プログラムを取り上げ、その単元（題材・教育プログラム）の構成法の特徴を分析し、能力・学力形成との観点から、図画工作・美術科の授業づくりの理論的根拠を提示する。そのため、多様な構成法を便宜的に７群に分け、分析・考察する。

７つの群において、初学者にとってとくに理解が困難な「ワークショップ型」「プロジェクト型」の第１群の単元構成法については、文献研究のほか、代表的な実践校の現地調査を踏まえ、その多様性と特性を期間内に整理する。第２群～第７群については、期間内に文献研究を終え、実践校調査については次期科学研究費による研究計画として構想する。

初学者は、美術教育の教育プログラムを開発・作成する上で、身体の活動行為を含めた学習経験の単元構成については苦手意識を多くもつ。そのため、座学形式の学習形態を主とする単元構成法に依存しがちとなり、美術教育の授業展開や指導案作成の理解を妨

げている。本研究の成果は、学部生及び教師経験の少ない教師又は美術経験の少ない教師に対して、多様性と複雑性をもつ美術教育の単元構成法と能力・学力形成、四観点評価との関係の全体像を示す方向性をもつ。これにより、プログラム・カリキュラム開発力、授業力向上の場において極めて有効な資料を提示することができる。本研究は、実践学的な視点から美術教育の多様性の総体を論理的に整理し提示するところに、独創的な点があるといえよう。

（２）単元構成法の多様性理解とその理論構築

こうした状況下で、佐藤　学氏は、授業活動全体を「教材と学習経験の方法論的組織」の問題から捉え、「単元の構成と展開」の総体を質的に注目するアプローチを提示してくれた(『米国カリキュラム改造史研究』)。本書の指摘は、授業実践の展開によって、教材が教科書教材の枠を越えて事実や事象まで拡大すること、学習経験は所与の知識や技能の記憶と定着の枠を越え、観察・実験・調査などを含む、発見的、探究的な思考経験、構成的作業と技術・技能的な経験、創造的、想像的な表現の経験にまで拡大することなどであった。この概念提示により、美術教育の思考過程に即した構成的作業や探究の経験を基礎とする「プロジェクト単元」や「問題単元」、教材の主題を核とする「トピック単元」「作業単元」「経験単元」など多様な教育プログラムの特性を描くことに道が開けた。

そこで、本研究では、初学者が美術教育プログラムを開発する視点から単元構成の在り方を捉え、美術教育における単元構成法の多様性と能力・学力形成、四観点評価との関係の全体像を描き、初学者の理解を促す理論的根拠を示す。そのため、今までの事前の研究準備をもとに、今日美術教育の教育プログラムの開発において顕著に取り上げられる多様な単元構成法を暫定的に以下の７群に分け、それぞれの特徴を整理・考察し、初学者への理解を促す方法を提示する。

３．研究の方法

本研究では、今日美術教育の教育プログラムの開発において顕著に取り上げられる多様な単元構成法を暫定的に以下の７群に分け、それぞれの特徴を整理・考察し、初学者への理解を促す方法を提示する。

①第１群：ワークショップ、プロジェクト
②第２群：エクササイズ、レッスン、タクト
③第３群：五感中心の活動、五感再生を目的とした活動
④第４群：ごっこ遊び、模倣遊び、造形遊び(みたて想像遊び、芸術家・職人活動の追体験)
⑤第５群：ストレッチ、リラクゼーション、リフレッシュ、アイスブレイク
⑥第６群：対面式プランミーティング、対話型・参加型構成法、
⑦第７群：ゴール・フリー方式、その他

４．研究成果

（１）平成 20 年度

平成 20 年度の研究期間内では、第１群の「ワークショップ型」「プロジェクト型」と第２群の「五感」等を取り上げ、文献・資料研究のほか、研究協力を得て実践校の現地調査とその単元構成法を分析・考察する計画であった。第３群以降の構成法については、成果を踏まえ、次期研究構想を立てた。成果として、「五感」については、「身体」との関連から検討し、「イメージと感性をひらく身体的アプローチの探究」（国際美術教育学会、８月）と、「造形・図工活動における導入時のショート・エクササイズの開発と実践評価」（美術科教育学会、３月）の研究発表を行った。「プロジェクト」については、戸倉上山田中学校での実践を中平千尋氏（桜ヶ岡中学校）から、「まちかど美術館」に関する実践を栗城敦志氏（加須小学校）から、神宮前小学校での実践を山田和弘氏（お茶の水小学校）から調査し、プロジェクト型実践法をまとめた。さらに、苅谷剛彦氏、市川伸一氏・他による「学力低下論争」にみる学力観と、プロジェクト、ワークショップ型授業の特徴、学力・能力形成の考察をするための基本文献を収集し、その関連を考察している段階である。なお、ワークショップに関しては、次年度以降に研究する変更をした。

（２）平成 21 年度

本年度は、ワークショップとプロジェクト等を取り上げ、文献・資料研究のほか、第 3 群以降の構成法については、次期研究構想のなかで検討していく。成果として、ワークショップとプロジェクトについて、今日的な美術動向と美術館教育普及等の社会教育、学校内授業がリンクし、新たな活動形態が提案されている現状を捉えることができた。

「ワークショップ」は「体験・参加型学習」といわれ、その構成法は自己形成・成長、エコロジーや環境教育、こころとからだ、心理学、合意形成、ビジネスでの問題解決技法など、「包括的な方法」となる。さらには、身体や感性（感情、情動）、グループ間での対人関係、霊／精神性（スピリチュアリティ）の諸側面までを重視することもある。美術教

育実践ではアート・ワークショップとして扱われている。「プロジェクト」は1930年代の活動主義運動、1940年代の生活適応教育運動へと展開し、戦後には「プロジェクト」を冠した教科統合の原理や、1980年代以降のコンピュータや情報テクノロジーが高度に発達した「ポスト産業社会」の可能性と緊要性に応えた「学習者主導のプロジェクト」など、思考と感情、観念と行為、個人と社会という二項対照的な要素を包括的に含み容れて展開された。こうした多様な学習が包含された美術教育の実践にみる構成法は、アート・プロジェクトとして展開され、「教育美術」や「美育文化」に具体例を見出される。

（３）平成22年度

最終年度の平成22年度においては、これまでの研究実績を踏まえ、資質・能力論に関する文献考察と種々の単元構成法の関係を整理し、成果を学会発表等によって公表し、成果と課題点の両面から研究を総括した。この総括過程を通して、単元構成における「題材」概念の解明と考察が不可欠であることを突き止めた。

文献研究の成果によると、第二次世界大戦までは、単元構成は「業・図」「教材」「題目」等が混在した。戦後、教材（経験）単元の導入後、「題材」主義に向かい、「題材」の意味や機能について、多くの課題点が議論された。やがて、「中学校美術指導資料」（文部省1982）によって「題材」概念が教育行政側から提示され、以後指導計画・授業づくりの中心概念となったと理解される。しかし、万博（1970）後、題材内容にイベント・祭典の要素が組み込まれ、「プロジェクト」「ワークショップ」等の授業展開とともに、「題材」概念が変容しつつある。それまでの臨画法や写生画法、構想画法という伝統的な単元構成は、課題・問題解決的な授業構成や対話型授業構成法が試みられるにつれ、「題材」概念が変容していることを示している。

ゆえに、学校図画工作科・美術科の「題材」概念は、受容・成立・変容したと仮説立てられる。この題材概念に着目するという着想を得て、その成立過程の解明と課題点の整理を通し、美術教育における単元構成の特徴を史的・質的に把握すべきであるとする教科内容学上の研究課題の存在が明確となった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 山田一美、題材とは何かー『美育文化』から探る1970年代後期の実践理論ー、大学美術教育学会誌、査読有、第43号、2011、Pp.367-374.

② 直井崇・森尻有貴・山田一美、造形・図工活動における導入時のショートエクササイズの開発と実践評価、美術科教育学会誌「美術教育学」、査読有、第31号、2010、Pp.239-250.

③ 山田一美、カリキュラム構成法としてのワークショップとプロジェクト、美術科教育学会2009年度東地区会東西合同地区会記録、査読無、2010、P.51.

④ 山田一美、ツウィン・フォーラム企画・構成の概要、キーワードから見ひらく2010年代のヴィジョンと実践、査読無、2009、Pp.1-8.

⑤ 山田一美、フォーラムを振り返って、キーワードから見ひらく2010年代のヴィジョンと実践、査読無、2009、Pp.91-95.

⑥ 山田一美、イメージと感性をひらく身体的アプローチの探究、InSEA World Congress Programme、査読無、2008、P.315.

〔学会発表〕（計３件）

① 山田一美、単元構成における「題材」概念の成立と変容過程の研究（１）、美術教育学会、2011年3月27日、富山大学五福キャンパス111講義室（富山市）

② 山田一美、『美育文化』から読み解く1970年代後期の美術教育実践理論、大学美術教育学会、2010年9月20日、武蔵野美術大学2号館（東京都）

③ 山田一美、美術教育は子どもの何を見てきたか、美術科教育学会、2010年3月27日、せんだいメディアテーク（仙台市）

６．研究組織

(1)研究代表者

山田　一美（YAMADA　KAZUMI）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：８０２１０４４１

（以上）